

---

# 神勇者と死神魔王 Re-Make

柳条湖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神勇者と死神魔王 Re - Make

### 【Nコード】

N5604Z

### 【作者名】

柳条湖

### 【あらすじ】

神に選ばれた勇者、死神に選ばれた魔王。

神は勇者に魔王を打倒すべく力を与え、死神は魔王に勇者を迎え撃つ力を与える。

これは神に選ばれ神勇者となった少年と、死神に選ばれ死神魔王となった少年の二人が織り成す、戦ったり協力しあったりな何だかんだの日常系異能コメディ。

## 神様は俺と共に

真夏日。

それは茹<sup>う</sup>だる様な暑さと云う奴か、それとも、もつと分かりやすく茹<sup>ゆ</sup>だる様な熱さと言い換えるべきだろうか。

燦然と照りつける太陽は最早一種の凶器と化し、大地を焼く灼熱の光線はまるでそれが楽しいかの様に俺達を苦しめる。

とてもではないが清涼とは言い難い生暖かい風は、吐き気を催す周りの人間の汗の臭いを巻き込んで窓の外から吹き込み、まるで嘲笑うかのように俺の頬を撫でながら充滿してゆく。

セミの鳴き声が聞こえる。耳を劈くそれが何故だかやけにけたたましく感じる。

言うなれば、ここは地獄の三丁目。通称『学校の教室』としたところか。

「真っ白ね」

「（五月蠅い。）」

俺の名前は『神林修弘<sup>かみはやめいひろ</sup>』。年齢は十五歳。体格は中肉中背でこれといった特徴は無し。容姿、学力、運動神経はどれも素晴らしく中の中。

他に言えば『神勇者』なんてビククリするような肩書を持っているが、とりあえずは気にしないで置いて貰えるとありがたい。

ここでは特徴の無いその他大勢と名乗らしていただこう。

「あ、酷いわ。こんな美しい女神を捕まえて五月蠅いだなんて！私、傷付いちやう」

「（じゃあもつと傷付いているかのような表情で言って貰えませんかねえ、そういうことはー！）」

楽しげな笑顔を崩さないこいつの名前は『シエアリー』。天真爛漫で天衣無縫の女神。

ここでいう女神とは比喻や誇示誇張などではなく、そのままの意味である。

神様、というやつなのだ。

ちなみにこれらは痛々しい俺の妄想とかではない事を留意して頂きたい。

「で、真っ白なのね」

「（分からないんだよ!）」

その姿は俺しか見る 正確には『視る』だそうだが 事は出来ず、その声は俺以外には聞こえ これも『聴こえる』が正確らしいが、俺だけが彼女に触れる事が出来る。一部例外はあるのだが、それについてはここでは触れない事にしよう。

何の因果なのだろう、どうして俺なのだろうと何度も思いながら、俺はもう一年以上シエアリーと共に過ごして来ている。在り得ないほどにくだらないシエアリーの“ある目的”の為に。

「じゃあ教えてあげる。ここはこうだね、こうしたら出来る

わ

「（……なるほど。）」

まあそのシエアリーの目的に付き合う事で俺にもかなり大きなメリットもあることだし、特段急ぐような目的でもないのだから、こうして俺はシエアリーと共に日々を生きている。

「はい、では試験終了。解答用紙を集めるのでその場から動かないように。」

俺は回収に来た教師に満点確実の答案用紙を手渡した。

うーん、と俺は思い切り背伸びをして座席から立ち上がる。

開放感　試験最終日を終え、後顧の憂いも無い晴れ晴れした気分は学生ならば誰もが通る道だろう。

「修弘君、試験どうだった？」

「ん？ああ、好美か。」

不意に声を掛けられたので振り返る。声で既に分かっていたが、あえて気付かぬ風で振り返り確認した。予想通り、そこにいたのは『三浦好美』その人であった。

可憐で清楚、性格は温厚で物静か、人当たりも良く友人は多い、とまるで大方の男性の描く理想の女性像を体現したかのような少女である。

ちなみに相当に頭も良く、学校の試験程度はほぼ全て満点、全国模試の成績でも常にトップ5ファイブを競う程だと云う屈指の秀才　天才でないところがミソ　少女である。

「そうだな。ま、いつも通りって奴さ。」

「そうなんだ。やっぱり修弘君は凄いな。」

手をひらひらと振りながら何の気無しに答える俺に、何の邪気も無く破顔して俺を褒める好美。

むず痒くなる様なシチュエーションだが、俺の心境はそれほど穏

やかではない。

言うまでも無く、この学校の中で好美の存在はクラスのマドンナ（古）なんていう些細な存在ではない。

この学年……いやいや学校全体の全ての女子の中で、好美の人気は断トツにナンバーワン。むしろ、これこそがオンリーワンなのだと言わんばかりの異常な人気を誇っている女子なのだ。

そんな彼女と親しげに喋っていたら……まあ、語るまでも無い。周囲の妬み嫉みの視線はナイフよりも鋭く俺の背中を抉るのだ。

幼馴染と云う理由だけで彼女とこうして話しているには、少々敷居が高い少女なのである。

「あ、じゃあ俺、この後用事あるし、帰るわ。お疲れさん。」

「うん。お疲れ様。」

ピツと片手を上げて好美に別れの挨拶を告げ、即座に翻して俺は教室を後にする。

好美のどこか寂しげな表情が印象的だった。

「チキンね」

「五月蠅え!!」

シエアリーの齒に衣着せぬ物言いに、俺は周囲に誰もいない事を確認してから言い返す。

実は教室内で好美と話していた時もシエアリーは散々俺をからかってくれていたのだが、敢えて意識せずに放置しておいたのだ。その鬱憤を晴らす意味もあってか、シエアリーの表情はいつもの三割

増しに良い笑顔である。

「やれやれ……」

嘆息して首を振る。一息つく時の俺のいつものジエスチャーである。

「ここは近所の公園だ。」

試験日であったために学校は早く終わり、今の時刻はまだ昼前。そのせいか公園内には未だ人影は見えない。

「ま、理由はそれだけじゃないんだがな。」

「来たか。」

用事があると言つのは嘘じゃない。

そんな誰にともない言い訳を心の中で口にしながら、俺は背後を振り返る。

「よう修弘。試験はどうだった？ま、聞くまでも無かるうが。」

「よう弘昭。試験はどうだった？ま、聞くまでも無かるうが。」

試験終了の今日今この瞬間、俺とこいつはこの『いつもの公園』で待ち合わせをしていた。

そいつが先に言葉を発した。だから俺は皮肉を込めて同じ言葉を返してやる。

「それを俺に聞くか？言うまでも無いね。俺にはジエダーが憑いてんだぜ。」

「知ってるさ。だがそちらこそ愚問だ。俺にだってシエアリ

「が憑いているんだぜ。」

俺の無二の親友にして最大の宿敵ライバル参上と云う所だ。

名を『寺門弘昭』。やや筋肉質な体系だが特段何か まあ、それなりに得意なようではあるが スポーツをしているというわけではない。

性格はお調子者の一言に尽きる。放置しておけばきっとこいつは一日中冗談を言い続ける事だろう。

だが、人の心の機微には実は敏感で、相手が気にいる話題を提供できる機転の利く男であったりもする。

そして、先に言っているシェアリーの事が視える例外の一人。

肩書は『死神魔王』。厨二病患者もビツクリの邪気眼っぷりだ。

しかし、これは妄想なんかじゃない。どうということなのかは……  
おいおい説明していくとしよう。

「ふむ。」

その一言を呟いただけでニュツと現れたこいつがジエダー。

黒いボロボロのローブを頭からスッポリと被り、骨ばった顔はまるで髑髏。ローブの裾から少しだけ見える手足は骨と皮以外の全てが削げ落ちたかのように細々としている。

まるで死神の様な有り様で、そしてジエダーは実際に死神だ。

「相変わらずだなジエダー。フランクに行こうぜ、フランクにや。」

「むう。我は……雄弁な方では無き故……」

見た目は怖いけどジエダーは恥ずかしがり屋さんなのだ。そこに萌えるぜ……見た目は怖いけど（大切な事なので二回言いました）。



「さて、余興はこの辺にして、そろそろ始めつか。」

「『<sup>キープオフ</sup>人払い』の結界を刻んだからな。邪魔は入らないさ。」

やっぱりな。時間が時間とはいえ、この広い公園に誰もいないとおかしいと思っただぜ。

「構えなクソ魔王。今日こそ蹴散らしてやる。」

「受けて立つよ雑魚勇者。長年の戦いにけりを付けようじゃないか。」

戦いの前口上を述べる俺達。

長年って、まだ一年程度だけだな とはつつこまない。

「行くぞシエアリー！」

「ハアイ」

「やったるうぜジエダー！」

「うむ！」

ここに神勇者と死神魔王の戦いが始まる。

「俺から行くぜ！『<sup>ライトニング</sup>横薙ぐ閃光』！！！」

突き出された俺の右掌から弘昭に向けて一筋の雷光が迸る。

シエアリーから与えられる神の力を使って放つ俺の技<sup>スキル</sup>。無論、常人が喰らえば消し炭になる程度の威力はある。

「その技はもう見たさ。『<sup>シャットアウトハリア</sup>全てを遮る結界』！」

弘昭も俺の技に対してジエダーの死神の力を使う技<sup>スキル</sup>で対抗してくる。

俺の放った雷撃は弘昭を貫く数センチ手前で見えない壁に阻まれて霧散した。

「防ぐのもお見通しだ！」

「後ろに回るのもお見通しなんだよね。」

俺は攻撃を阻まれる事は分かっていた。だから『横薙ぐ閃光』の発動と同時に目にも止まらぬ速さで弘昭の後ろに回り込んだのだが、どうやらこちらの動きも読まれていたらしい。だからどうという事は無いのだが。

「関係ねえな！『神の鉄槌』！！！」

「上等！『死神の鎌』！！！」

一撃で街一つ吹き飛ばす威力を持つ俺の拳が、一薙ぎで街に住む全ての人間の意識を刈り取る弘昭の手刀が、両者同じタイミングで激突した。

荒れ狂う衝撃波。吹き荒ぶ暴風。抉り上がる地面。

人の造り得る威力を超えた人外の衝突が、俺と弘昭を中心に甚大なる被害を巻き起こす。

「クク……ハッハッハッハア！！！！」

「ハハ……アハハハハハ！！！！」

狂ってしまったかのように互いに高らかに笑い上げる。

俺の繰り出す必殺の技も、弘昭の繰り出す必勝の技も、どれほど手数を増やそうと、どちらもクリーンヒットしない。

そもそも簡単にクリーンヒットするようなら俺達はこうして戦っていない。

「よし、次で終わりにしよう。最強の一撃をもってぶっ飛ばしてやる！」

「そうだな。最強の一撃をもって受けたってやるぜ！」

互いに腰を低くして構える。

同時に息を吸い込む。

カツと全身に力を込めて……両者同時に叫んだ。

「『ハルマゲドン最終戦争』！！！」

バッドブレイク

「『崩天の一撃』！！！」

自身を砲弾と化し、莫大な威力をもつて的に突っ込む突撃技。俺が最後に選んだ技はそれだった。

対して弘昭の方に傍目に見える変化は無い。しかし俺には分かる。弘昭が後ろへ構えた右腕に絶大なまでに力が一点集中している事が。

「ラアアツシャアアアア！！！」

「ハアアアアアアア！！！」

両者同時に咆哮。

一撃で日本列島だって吹き飛ばす威力を持たせた俺のタツクルが、目にも止まらぬ速さで弘昭へ迫る。

弘昭はその場から動かさず、突っ込んでくる俺に合わせる様に振り被った右腕を掌底の形で突き出した。

「吹っ飛べやああああ！！！」

「テメエがなあああ！！！」

互いの技がぶつかり合う。

その瞬間、その刹那、世界から全ての音が消失した。

結果は、

「ま、引き分けか。」  
「仕方ねえって。」

同時K・O・

俺と弘昭は互いに相手の技の威力スキルに負けて吹き飛ばされ、無様に地べたに寝転がっていた。

「よっこいせつと。やれやれ疲れた。」  
「同感。あゝ疲れた〜でも楽しかったぜ〜」  
「確かにな。」

ゆっくりと体を起こす。

互いの技は相殺されたが、その際に発生した余波までは消し切れ  
ておらず、公園の中は見るも無残な様相を呈していた。

「あゝ……シエアリー？」  
「何？」  
「頼んだ。」  
「ハアイ」

少々罪悪感にかられた俺はシエアリーに頼み、公園内の修復を行  
った。

一秒と経たず、公園内は俺と弘昭が戦い始める前の綺麗な状態に

戻っていた。

「『<sup>キーボード</sup>人払い』も解除つと、頼むぜジエダー。」

「御意。」

これで数秒の後には今まで通り普通にこの公園に人が集まってくるだろう。

少し前まで人外の戦いがここで行われていたとも知らずに。

「……帰るか。」

「そうすつか。あ、ゲーセン寄ってかね？格ゲーやりたい。」

「好きにしる。」

「じゃあ決定。」

試験終了日にその足でゲームセンターへ行く。

何とも分かりやすい青春の構図に俺の口元は若干ながら緩んでいたのだった。

「シエアリー、良いだろ？」

「良いに決まってるわ。」

「ジエダーはどうだ？」

「異論は無い。」

神と死神の了承も取れた所で行くとしよう。

「もう一勝負、な。」

「望む所だぜ。」

俺と弘昭はこうして事あるごとに何かしらを競い合う。

今回の様に分かりやすい直接対決だったり、ゲームであったり、

スポーツだったりetc……

何故そんな事をしているのか、それを語るには一年前まで時間を戻さなければならぬ。

そう、俺がシェアリーと出会い、同時に弘昭がジエダーと出会ったあの時へ。

神様は俺と共に（後書き）

というわけで『神勇者と死神魔王』のリメイク版です。  
タイトルの『Re・Make』はいずれ外します。

以前より面白く、そして読み応えがあるよう作って行きたいと心が  
けますのでどうぞよろしくお願いします。

修「そう！俺達は帰って来たのだ！」

弘「まあ何でも良いけど、とりあえずカラオケに行くのはやめて  
おこつな。」

シエ「いきなり自虐は良くないわ」

ジエ「自嘲せず、自重せよ。」

既に読まれた方は分かると思いますが、少しずつ設定が以前と異な  
っております。

好美が修弘の幼馴染であったりなど、細かい所ですが差異がありま  
す。

以前と矛盾する箇所があったりするかも知れませんが、どうかお気  
にせず読んでいただけたらと存じます。

修「もうナレーターとは呼ばせないぜ。」

弘「まだ引き摺ってんのかよ修弘。」

シエ「根に持つわね」

ジエ「器の小さい男である。」

修「五月蠅え……」

以前の『神勇者と死神魔王』でのお気に入りだったキャラやストー  
リーは、リメイク版でも使いたいと思っています。

もし、前の作品をお読みになっていて、好きだったキャラやまたや

って欲しいストーリーなどありましたら、是非お教えください。  
可能な限り、取り入れて行きたいと思います。  
あ、でも、カラオケの話とか言いませんように。今度は僕が消され  
てしまいます故（笑

では、『神勇者と死神魔王 Re - Make』を

修「どうぞ。」

弘「よろしく。」

シエ「お願い」

ジエ「……します。」

仲良いな君達……



## 神との出会い そして勇者へ

それは不思議な夢だった。

まるで空中に浮いているかのような浮遊感と確かな足場を感じる  
だっ広い何も見えない虚空の空間。

例えるのなら、エレベーターに乗って高層ビルの頂上から下降する  
状態で壁と天井を取っ払ったらこんな感じになるのではないだろ  
うか。

あなたは今日から勇者よ。

ふいにそんな声が聞こえた。

俺はそれにただ答える。

「なんでやねん。」

思わず関西弁になってしまった。

神に選ばれたからよ。貴女は神に選ばれた神勇者として魔  
王を倒さなければいけないの。

「余計になんでやねん。」

訳が分からない。

勇者とか魔王とか、最近はライトノベルでだって敬遠される様な  
ワードを並べるんじゃないよーよーと言いたい。

理由なんて何でも良いの！兎に角君は今日から勇者になっ  
たから！地球のどこかにいる魔王を探し出してやっつけてね

「嫌だよめんどくさい。大体、地球のどこかってアバウトす

ぎるだろ！やってられっか！」

こんなわけのわからない夢を見るなんて、もしかして俺って相当終わっているのだろうか？

……やばい！不安になってきた！

めんどくさいとか言っても駄目 もう決定事項なのです  
あなたは私に選ばれた勇者。だから魔王を探して倒さなければいけないのです

こんな妄想してしまうなんて……ああそつだ。起きたら学校へ行く前に病院へ行こう。それが良いな、うん。

覚えておきなさい。私の名前は

そこで俺は目を覚ました。

ジリリリリ！！ジリリリリ！！

時代錯誤な目覚まし時計の音が木霊する。

耳を劈くその音は、俺が手を限界まで伸ばしてギリギリ届かない絶妙な位置で鳴り響き、寝起きな俺の脳髄を容赦なく攻撃する。

この猛攻から逃れる為には、心地良い布団の中から這い出て、そして体を起こし、目覚まし時計の脳天に一撃を叩き込まねばならない。

そんな労働基準法を完璧に無視した様な激務は、まだ目覚め切っていない朦朧とした思考では不可能だ。

よって、完璧に意識が覚醒するまでのもう少しの間、俺はこの攻撃を耐えなければいけない。

「私が止めましょうか？」

それは俯せに寝ている俺の頭の上から聞こえた。

「ああ……頼ん……だ……ZZZ……」

その言葉に俺は何も考えずに答えた。

ほんの数瞬の後、目覚まし時計の音は止まる。

「……ZZZ……っ!？」

流石に違和感を感じて飛び起きた。

「あ、起きた？おはよ〜」

一人の女性と目があった。

美しい女性だった。

優美と表現するのが正しいのだろう造形の整った顔には、はち切れんばかりの笑顔が張り付いている。

この世の全てが楽しくて仕方が無いかのような、嘘偽りの混じりっ気の無いその笑顔に思わず俺の動悸が速くなってしまっ。

「なん、だよ……お前。」

何とか捻り出せた言葉はそれだけだった。

「私？私は神よ。神様。女神。ゴッデス。何でも良いわ。名

前はシエアリー。覚えてないかしら？」

「ふざけんな」とつい口を突きかけたが、しかしシエアリーと名乗ったその女性が、女神云々は差し置いて、普通の女でない事は明白だった。

まず宙に浮いている事からして普通でない。

それにセミロングの透き通るように綺麗な金髪も、ここが日本の一般家庭の、それもたかが中学生の寝室である事を鑑みればあり得ない事だ。ちなみに俺にそんな彼女はガールフレンドいないし、そもそも彼女がガールフレンドいた覚えも無い。

服装は白い小袖に緋袴を履く巫女装束。そこに自身の体を取り囲むようにフワフワと漂う羽衣を纏っている。その様相は、その美しさも相まって天女のように。

シエアリーと名乗るこの女が女神であるという事も強ち嘘ではないのかも知れない。

「覚えてないかって……どういう意味だ？」

もつと他に聞くこともあるだろうに、俺の口から飛び出た質問はそれだった。

自分の度胸の無さを恨みたい。

「そのままの意味よ。ちゃんと名乗ったでしょ？夢の中で」

夢？……あれ？どんな夢を見たのか全く覚えてない。なんだかとても疲れたような気はするけれども、内容は一切覚えていない。

「忘れちゃったの？仕方ないわね。もう一回教えてあげる。

私の名前はシエアリー。貴方を勇者に選び、魔王を倒すための力を与える女神よ」

うっん……結局、女神云々が眉唾なんだよな。

他にも考えるべき事はあるのだろうけれど、何だかんだで色々と混乱していた俺は聞き流してしまった。

「女神ねえ……何か証明できたりしないのか？」

「貴方は自分が人間であることを証明できるの？」

見事に返されてしまった。

我思う故に我有り　なんて、哲学で乗り切れるようにも思えな  
いし、どうにもシエアリーとかいう自称女神に対して口論で勝てる  
ような気がしない。

「修弘く？起きてる？」

ふいに部屋の外から声が聞こえる。

いつまで経っても部屋から出てこない俺を怪訝に思って、そして  
結論俺がまだ寝ていると思いついで起こしに来たのだろう俺の母親  
の声だ。

「ご飯を作ってくれてるみたいよ。行きましょう、勇者ノブ  
ヒロ」

「とりあえず、その呼び方はやめてくれ。」

扉の外にいまするであろう母には聞こえないよう小さな声で呟いた。

「分かったわ。行きましょう、ノブヒロ」

「やれやれ」と嘆息して、俺は自分の部屋の扉を開けた。  
母はすでにそこにはいなかった。

「今朝は少し寝坊だな修弘。それに着替えてもいないじゃないか。」

お前が学校に遅刻するのは勝手だが、母さんの美味しい朝御飯を時間が足りないなどと言う理由で残すのは許さないぞ。」

リビングに行けば、既に母は俺と父の朝食の準備を始めていた。リビングに入った俺に真っ先に声を掛けてきたのは言うまでもなく父親である。

「嫌だわアナタったら。褒めても何も出ませんよ。ほら修弘も、そんなところでボーっとしてないで、さっさと座って食べちゃいなさい。」

人の良い笑顔で父を軽くあしらう母の姿は中々に熟練された専業主婦そのもので、毎朝のこの年になっても未だ衰えぬラブラブ光線には息子として辟易しているのだが、今日に限ってはそんな事を考える余裕もないほどに驚愕に包まれた。

「え!?!」

思わず父とシェアリーの顔を見比べてしまった。

「どうしたんだい、母さんが僕に告白された時のような顔をして?」

そんな何も無い所と僕を見比べたりしたりして、もしかして蚊で

もいるのかな？」

俺の真後ろにブカプカ浮いているシェアリーとかいう自称女神の姿が見えていない……のか？

「心配しなくても、私の声はノブヒロにしか聴こえないし、私の姿はノブヒロにしか視えないわよ」

どうして、なんてテンプレートな疑問は頭から吹き飛んだ。

ただ一つだけ、もしかして本当に女神なのかも知れないという疑惑だけが俺の脳内を支配していた。

「ほら、修弘。冷めちゃうでしょ？早く食べなさい。」

「そっだぞ修弘。母さんの美味しい朝御飯が冷めたりしたら勿体無いだろう。」

そんないつも通りの夫婦のやり取りを受けて、俺はほとんど放心状態で朝食を口に運んだ。全く味がしなかった。

「母さん、今日は修弘が冷たいよ。」

「仕方ありません、年頃なんです。あの子にも色々ありますよ。」

とは、食べ終わってリビングを出て行く俺の背中であわされた夫婦のやり取りである。

「あゝ……着替えたいんだが、部屋の外にいてくれないか？」  
「嫌」

一言どころか一文字で切って捨てられた。

「いやだから……」

「嫌」

「あの……」

「嫌」

取りつく島も無いとはこの事である。

「私は神だからノブヒロの裸を見ても何も感じないもん」

「いや、シエアリーさんは」

「呼び捨てでいいわ」

「シエアリーはそうでも良いかも知れないけれど、思春期真っ盛りの俺が女性の前で服を着替えるというのは些かというか何と  
いうか……」

ぶっちゃけ気まずい。

「私に裸が見えなければいいのでしょ？」

「そりゃそうだけど……」

「えい」

「!?!?」

一瞬、俺の着ていた寝間着に金色のエフェクトが掛かったかと思いきや、一瞬にして服装が変化していた。

そう、青と黒のコントラストが描かれた寝間着から、ベタ塗を失敗したかの様な色で塗りつぶされた漆黒の学生服へと。



「じゃ、行きましようか。あ、ノブヒロの言葉は思うだけで私に伝わるから大丈夫よ」

俺の心配を先取りしたかのようにシエアリーが言う。

この時点で、俺はシエアリーが女神であることに對し、ほぼ全ての疑いを捨てていた。

通学路 地元の中学校に通う俺の通学手段は徒歩であり、既に死語認定されていてもおかしくない様な、そんな名前のつけられた道程を歩いている。

周りには同じ中学に通う仲間たちの顔もちらほらと見える。

どいつもこいつも「来年には受験に自由なんて奪われて無くなるんだから今のうちに楽しんでおこう」とでも言いた気な表情で風を切って歩いている。

「(で、さっきはバタバタしてて聞き流しちゃったけど、勇者が何だった？それに魔王がどうこうって聞こえた気がしたんだが……)」

とりあえず、心の中で思ったことがシエアリーに伝わるといふ事の実験と同時に気になる事を尋ねてみる。

「暇を持て余した神々の遊びよ」

「(そんな人間のジョークが通じるとはね。で、実際のところは?)」

あまりそつち系のネタに詳しく無い俺はシェアリーの冗談をアツサリ流して核心を訪ねた。

「ゲームなのは間違いないわ。特に名前も付けられてないんだけど、便宜的に『勇者魔王ゲーム』とでも呼びましようか  
つまりね、神である私が選んだ人間が勇者、同じく死神が選んだ人間を魔王として、勇者と魔王を戦わせようっていうゲームよ」

迷惑千万極まりない。

「（つまりなんだ？俺はシェアリーに選ばれて勇者になったわけで、地球のどこかにいる死神に選ばれた魔王を探し出してやつける……と？）」

「そういう事」

思いつきり頂垂れた。

分かり易く言うと『OTZ』ってくらい膝から崩れ落ちた。

周りから奇異な視線を向けられたけどそんな物に構ってられないくらい落ち込んだ。

「あ、でもでも、私だって可能な限り力を貸すし、女神の私の力が使えるって凄いことなのよ」

シェアリーが何かフォローするように言っているが、面倒臭さMAXの俺には届かない。

だが何時までもグダグダやっているわけにもいかないのとおりあえず学校に行こうと思いつきり立ち上がった。その時だった。

「グゲツ！？」

「あ……」

後ろにいたらしい人の顎に思いつきり頭突きを喰らわせてしまった。

「マサヤン!？」

そいつの友達らしきピカソ絵画みたいな髪型の男が驚いた声を漏らした。

俺の頭突きを受けて吹っ飛んだ土木作業機材みたいな髪型をした男、マサヤンとやらが立ち上がり、凄味を聞かせた表情で俺に迫ってくる。

「おいどうしてくれんだよテムエ。顎の骨が砕けたじゃねえか!」

普通に喋れてますが!?

「おい、こいつ攫っちゃまえ。」

マサヤンとやらの言葉と同時に、先のピカソ絵画みたいな髪型をした男と日本庭園みたいな髪型をした男に俺は両脇から挟み込まれ、逃げられないようにがっしりホールドされて路地裏の方へ連れ込まれた。

アーツ!でなことを祈りたい え?何を言っているか分からないって?世の中には知らない方が良い事もあるのさ。

「とりあえず治療費と慰謝料出してもらおうか。」

よく見たら彼らが着ているのは学ラン つまり、この不良気取

りの三人組は俺と同じ中学の生徒と言うことが……

「断るね。そんな素敵センスな髪型の人達に払う金なんかねえよ。」

と、虚勢を張ってそう答えた。そう、虚勢を張って……

顎がガチガチと震える、膝が唾う、手汗は尋常じゃない。

そう、基本チキンな俺は、初めて関わる不良と言える人種に対し思いつ切りビビッていた。

当然、そんな俺の内心を正確に見抜いているであろう不良は、勝ち誇った様に不敵に口元を歪めた。

「そうか。痛い目を遭いたらしい。」

マサヤンが右拳を握るのが見えた。気がした。

時の流れがやけにスローに感じる。

まるで本当に時間が遅くなっているかの様な……？

「『<sup>イメージ</sup>想像し創造せよ』！それが勇者たる貴方が私の神の力を使う条件よ。」

「（……イメー………ジ………？）」

そんなシエアリーの言葉が何故か脳髓の奥に染み渡った。

咄嗟のことで何が何だか分からなかった俺は、兎に角何か想像しなければと焦り、そして不意に思い浮かんだ映像は、目の前にいる不良を爽快に殴り飛ばす自分の姿だった。

「……え！？」

バゴンッ！と凄まじい音が響いた。

気付けば、俺は右拳を突き出した姿勢で固まり、マサヤンはその拳を顔面に受けて三メートル以上ノーバウンドで吹き飛んだ後、突き当りまで地面をゴロゴロと無様に転がり、そこでグツタリといっている。

「（これって……）」

「『<sup>スキル</sup>技』 私が貴方に、ノブヒロに与える力。上手に使っ

てね」

『<sup>スキル</sup>技』 ね……なるほど。」

「マサヤン!？」

「おい?どうした!？」

あまりにも突然の事だっただけに、残りの不良二人は一拍遅れて状況に気付き、吹っ飛んだマサヤンに駆け寄った。

「生きてる……けど、お前……一体、何しやが……った?」

不良の一人ピカソ絵画みたいな髪型の方が震える声音で俺の方を振り返りながら問い掛けてくる。

恐怖を感じている人間とはこんなにも分かり易いものと云うくらいい声は裏返って、脚はガタガタと震えている。

先程までの俺の様だ。

「何をしたんだろうね。教えて欲しいか?教えてやるよ。その頃にはお前ら三人ともそこに仲良く寝転がっているだろうけどな。」

再びこの不良二人を爽快に殴り飛ばす自分をイメージする。

刹那の後、現代アートの様な髪型の不良三人衆は、仲良く路地裏の地面に接吻する破目になっていたのだった。

「神の力か……便利なもんだ。」

こんな力が使えるのなら、多少面倒事に巻き込まれるのも悪くないと、そんな風に思った。

「『<sup>スキル</sup>技』はノブヒロのイメージ次第でどこまでも威力が伸びるわ。ただのパンチで銀河系ごと吹き飛ばす事も可能よ。」

「まじで!?!?」

ただ、まあ調子に乗り過ぎる事だけはやめておこうと、この時胸に刻んだのだった。

## 神との出会い そして勇者へ（後書き）

ここ最近は無かった素早い更新！

やっぱり僕の作品の中でも特に力が籠っていた作品だけに思い入れが違います。

『微妙な勇者と最強なヒロイン』の方が嫌いというわけではないのですが、最近迷走気味だったので、少しこちらの方を進めてリフレッシュしてから、そちらの方も進めて行きたいと思います。

『微妙な勇者と最強なヒロイン』の方を読んでくれている読者さまには申し訳ないですがご了承ください。

では、次回は死神に選ばれた少年の話になります。

次回もよろしくお願いいたします。

なお、評価感想コメントなど随時受け付けております。

一言だけでも結構ですので、気楽な気持ちで感想など残していただけたらと存じます。

よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5604z/>

---

神勇者と死神魔王 Re-Make

2011年12月21日23時48分発行